

Eureka IX

六年制通信 No.37 令和4年3月11日(金)号

及第点を越える

3月1日は高校の卒業式でしたね。六年制の諸君にとっては小学校と同じ6年もの月日をこの学び舎で過ごしたのですから感慨深いものがあるでしょう。卒業に際して私はいつも誇りに思うことがあります。それは毎年6年間皆勤賞を受ける生徒、すなわち三重中学校に入学以来6年間、一日も欠席はおろか遅刻も早退もなかった生徒が何人いるということです(今年は9人でしたかな)。心身の健康の維持ができており、親御さんのサポートももちろんあるでしょうし、とにかく素晴らしいことです。私はどんな賞より価値のあるものだと思っています。

高校を卒業する諸君は、実のところ何を卒業しどんな世界へ行こうとしているのでしょうか。卒業式は英語では **graduation** (グラデュエーション) ですね。この語は **grade** (等級) から来ていて、他に例えば **grader** (グラデーショナル) などカタカナの日本語になっているものもあります。卒業式に初めて **graduation** を用いたのは1423年だそうで、もう600年の歴史があるのですね。アメリカ起源だそうですよ。

英語にもう一つ **commencement** (コメンズメント) という語があります。動詞の **commence** はラテン語からフランス語を経由して英語に入った語で意味は「始める」です。その名詞形が卒業式の意味に用いられたのは1387年のことらしい。これはなかなか味わい深い語ですね。「等級」の方はグレードがだんだん上がって、はい終了という感じですから何も面白くないのですが、卒業を何かの「始まり」ととらえる発想は、何というか若者らしい潑刺とした意気を感じます。三重中学校の校歌に「眉上げて」というフレーズがありますが、あの感じですね。

6年間の「児童」を終え6年間の「生徒」を卒業する。ここに何らかの「始まり」があると考えるわけです。児童と生徒の違いについては以前説明したことがあります。児童は子供ですから、周囲の大人は(学校の先生を含めて)同じことを何度も言ってくれます。子どもは一度では理解できないと思われているからです。先生の話聞き逃すのも、子どもだから仕方がない、だからもう一度言うわけです。小学校では児童の「聞いていませんでした」を許していると言った方がわかりやすいですかね。それが中学校に入り「生徒」になると、大人になることが前提ですから「聞いていませんでした」は通りません。一度で人の話を理解しないとイケないし、仮に聞き逃したとしたらそれはすべて自分の責任ですから、もう一度教えてくださいとお願いしないといけません。大人になるということは、自分のミスで人の時間を使うことのないよう行動できるということですから。

さて、では何からの卒業なのか。私はルールやマニュアルからの卒業だと考えています。もちろん守らなければならない社会のルールを破っていいと言っているのではありません。そんなことはわかり切っていますね。気づいていないかもしれませんが君たちは生徒である間、実は多くのルールに守られて生活していたのですよ。ルールに則って生きるのは楽なのです。ルールがあることは不便なことではなく、他に集中して取り組めるものが安心して持てるということです。君たちを守る様々なルールが学校にはあった、そのことを卒業したら知るでしょう。

マニュアルは一つの知恵と言っているかもしれません。こういう場合はこうすればよいというのがマニュアルですね。個々人の能力の差を埋めようと、つまり誰もが同じことができるようにするという目的でマニュアルは作られてきたのです。学校の勉強にも多くのマニュアルがあったのですよ。ただし、マニュアルは及第点を取るためのものであって、誰もが満点を取ることでできるマニュアルは存在しません。それは、及第点を越えるには個々人の能力が大きく左右するからです。及第点を越えるには自分の工夫と努力が必要です。ここに個人差が出ます。卒業すればそのことを知るでしょう。それに、マニュアルの欠点は優れたマニュアルであればあるほど人間は思考停止に陥るといえることです。マニュアルに書いてないことはできないといった情けない人間になってはいけません。

こう考えてみると、卒業したら君たちは自分の創意工夫と努力で生きていく、本当に自由な世界に入っていくのですね。中学も18日に卒業式を控えています。六年制とは言えはじめははじめです。卒業に際し、自分の成長を確認するといいいでしょう。

今週のおすすめ

・星野道夫 『旅をする木』 (文春文庫)

33篇のエッセイ集。本のタイトルはエッセイの一つから取っています。著者は写真集も出しています。舞台はアラスカ。オーロラがいかに美しくとも手を伸ばせば届くかと思われるような満天の星空に流星が走ろうとも、松阪の冬に震えている身には無縁の土地ですが、著者はアラスカの自然をこよなく愛しています。この本には自然の美しさが余すところなく描かれ、しかも自然に対する敬虔な心がよく書かれています。

16歳でアメリカ一人旅をした著者ですが、それを応援したのがサラリーマンの父親とのこと。ちょっとなかなか聞かない話ですね。普通は止めますからね

私の選ぶベストエッセイは文庫 p.p.119-123 の「もうひとつの時間」です。あまりに美しい光景を見た時、それをどのように人に伝えればいいのか、そんな問いに「自分が変わればいい。美しい光景に感動したら自分が変わればいいんだ」と友人が答える。このシーンが好きですね。この著者は44歳でヒグマに襲われ亡くなります。

「いささか私的すぎる解説」を池澤夏樹が書いています。これがまた名文で、星野さんの死がまだ受け入れられないことを、巧みな追悼の言葉で綴っています。

若い君たちは瑞々しい感性でこの本が読めるでしょうね。羨ましく思います。

BGMは 山口百恵 の 乙女座 宮 でした…。